様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０６６５７

研究課題名（和文）希望に着目した社会科授業研究―授業実践の記録と教師の語りから―

研究課題名（英文）Study of social studies classes that form hope for society

研究代表者
村井　大介（MURAI, Daisuke）

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：８０７７９６４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、教師が社会系教科の授業を通して実現しようとしてきた希望を、授業実践の記録と教師の語りから分析し、社会への希望を育む社会科授業の原理と方法を明らかにすることである。
分析の結果、（１）教師が実現したいと願ってきた希望とその背景、（２）社会科の授業を通して生徒の形成した希望の特徴、（３）授業において希望を実現するための教師の方略を明らかにし、社会的な希望を育む実践例を提案した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the principle and method of social studies class that forms hope to society.
By analyzing from records of teaching practice and narratives of teachers, what I have made clear are: (1) hope and background that the teacher wished to realize, (2) characteristics of hope formed by students through social studies class, (3) teacher's strategy to realize hope in class. In conclusion I proposed a practical example to form social hope.

研究分野：教育学　教科教育学

キーワード：社会科教育　希望　授業　授業実践記録　教師　児童・生徒　現代社会の諸課題　ライフストーリー

１．研究開始当初の背景

研究の背景には、希望学の研究と教師のライフストーリー研究がある。希望学の研究については、玄田・宇野（2009）は、「希望学という新しい社会科学が目指すのは、次の三つの普遍的な問いに対する答えの追求」にあるとし、次の三つの探究課題を提示している（pp. vii-viii）。

a)「社会において個人が形成する希望とはそもそも何なのか」
b)「社会が個人の持つ希望にどのような影響を及ぼすか」
c)「個人の形成する希望が社会状況をどのように規定するのか」

このように希望学では社会事象として希望を捉える点に特徴がある。

希望に着目した研究は、現在、教育学の研究においても注目されている。例えば、勝野（2010）や、中妻（2013）は、教職を希望の観点から捉え直すことの意義を示している。しかしながら、これまでの教科教育に関する研究では、教師が教科を教えることを、希望という視点から解き明かす研究はほとんどなされてこなかった。

鈴木（2015）は、「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」（日本では内閣府が2013 年実施）の結果から他国に比べて日本の若者が希望を持てていない現状を明らかにし、希望の有無と社会を変えられるか否かに関する見解の間には、強い相関関係がみられることを指摘している。このことを考慮すると、社会科教育が、公民的資質を育み、生徒に社会への参加を促していく上でも、授業の中で生徒の希望を形成していくことが重要であるといえる。

また、これまでの社会科教育における教師のライフストーリーに関する研究では、職能発達の形成過程に着目する一方で、教師が自分の言葉で教科を如何に意味づけて実践してきたかということは不問にふされてきた。教師が教科を教授する前提には目標があり、具体的な何かを実現しようとする願い（＝希望）がある。教科の目標は学習指導要領に示されてもいるが、実際には教師が自分の言葉で教科を教えることを意味づけ、願いを持って授業を実践してきたと考えられる。特に社会系教科（小学校・中学校の社会科と高等学校地理歴史科・公民科）は社会的な事実や諸課題を扱う教科であるため、こうした教師の教科への願いが、児童・生徒が社会に対して希望を形成していく上でも大きな役割を担ってきたことが予想される。

したがって社会系教科の授業を通して実現しようとしてきた社会への希望を、教師の実践記録と語りから明らかにすることは、社会科教育の社会的な意義と可能性を明確にする上でも重要である。

２．研究の目的

本研究の目的は、教師が社会系教科の授業を通して実現しようとしてきた希望を、授業実践の記録と教師の語りから分析し、社会への希望を育む社会科授業の原理と方法を明らかにすることである。なお、本研究では、「希望」を「何ごとかを実現しようとする願い」と定義する。また、「社会科授業」という言葉を、地理歴史科や公民科の授業を含めた、広い意味での社会系教科の授業を指す言葉として用いる。

この目的を達成するために、本研究では、これまでの社会系教科における授業実践の記録を、「希望」の視点から分析することを、第一の研究課題とする。

また、教師のライフストーリーの語りから、教師が社会系教科に見出した希望と、それを実現しようとしてきた過程を明らかにすることを、第二の研究課題とする。

以上の二つの研究課題を探究することを通して、最終的に、社会的な希望を育む社会科の原理と方法を明らかにする。

３．研究の方法

玄田・宇野（2009、pp. vii-viii）が提起していた、希望学の三つの探究課題を、社会科の授業実践に即して、「社会」を「社会科授業」、「個人」を「教師」もしくは「児童・生徒」に改編すると、次の a)’～c)’の探究課題が設けられる。

a)’社会科授業において教師が形成する希望とはそもそも何なのか
b)’社会科授業は児童・生徒の持つ希望にどのような影響を及ぼすか
c)’教師の形成する希望が社会科授業を如何に規定するのか

本研究では上記の課題を探究するにあたり、教師が授業を作成し実践するまでのストーリーに着目し、教師が授業を実践する上で抱いてきた希望と、その結果、生徒が形成するに至ったと考えられる社会への希望を明らかにする。具体的には、複数の授業実践記録を分析対象として取り上げて、先の a)’～c)’に、即して 次のｉ）～ⅲ）の３つの視点から分析する。その上で、実践間の相同に着目することで、社会への希望を育む社会科授業の原理を明らかにする。

ｉ）教師が社会科授業を通して実現したいと願ってきた希望とその背景
ⅱ）社会科授業を通して生徒の形成した希望の特徴
ⅲ）社会科授業において希望を実現するための教師の方略

教師が志向する希望と生徒の形成した希望については、特に社会との関わりに着目する。このことにより、社会科授業が社会への

希望を形成する上で果たしてきた役割を明らかにする。なお、分析対象とした実践記録は、記録が残っており代表性が高い実践であることから、民教連社会科研究委員会編『社会科教育実践の歴史（中学・高校編）』で取り上げられている授業実践、『社会科の初志をつらぬく会の実践記録選』に掲載されている授業実践、『社会科教育研究』に掲載されている現代社会の諸課題を扱った実践研究論文、とした。また、教師のライフストーリーの語りについては、筆者がこれまでに行ってきた公民科教師 17 名へのインタビュー調査の結果を分析対象とした。

４．研究成果

(1) 教師が実現を願った希望とその背景

教師のライフストーリーのインタビュー記録を分析した結果、教師は、自身の言葉で担当する社会系教科を通して実現したい希望を形成していた。こうした教科に対して教師が形成した希望の背景には、次のような要因がみられた。

い）職業経験や家庭状況など教師の生い立ち
ろ）各学校で出会った生徒のニーズ
は）環境問題や投票率といった社会的な要請
に）教師自身が探究にしてきた学問の成果

また、授業実践記録から教師が特定の授業を通して実現したいと願う希望について分析した。その結果、社会の文脈、学校での児童・生徒とのやりとりの文脈、教育団体・学会・教育行政といった教育関係組織がつくり出した文脈、の三つの文脈が授業を通して実現したいと願う希望を形づくっていた。

授業を通して実現したいと願う希望は、社会の課題に向けられている場合、生徒の認識に向けられている場合、生徒の社会生活や社会とのかかわり方に向けられている場合の三つの方向性がみられた(図１)。

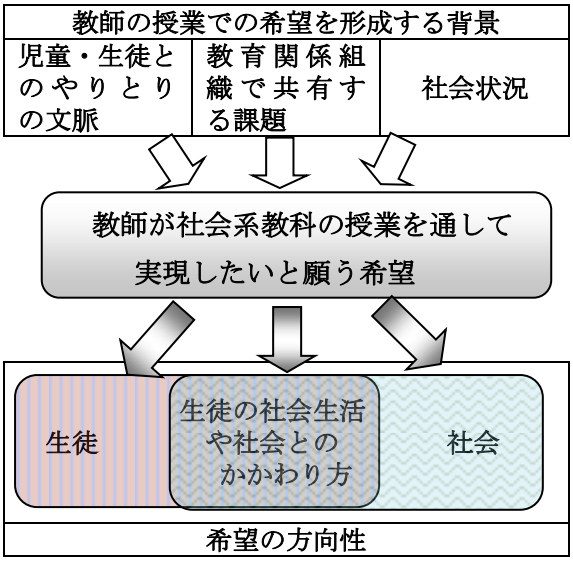

図１　授業での教師の希望の背景と方向性

(2)社会科授業で生徒の形成した希望の特徴

授業実践記録に掲載されている児童・生徒の発言や感想文から、授業を通して形成した児童・生徒の希望を分析した。

児童・生徒の発言や感想文には、「(何かを)していきたい」という自己の行動を規定していくような行為拘束型の希望の表明がみられる一方で、「(何かを) して欲しい」といった他者への希望もみられた。このように授業を通して社会への希望を生徒が形成した場合にも、自己の行動によって実現しようとするか、他者に実現を委ねようとするかの二通りがみられた。

また、授業を通して形成する希望（＝実現しようとする願い）は、個人的なものである場合もあれば、学級などで共同で形成し共有している場合もみられた。

これらのことから児童・生徒の形成する希望は図２のように、二つの軸によって四つの類型として示すことができる。一つ目の軸は、自ら実現に関与するのか、他者に実現を委ねるかの軸である。二つ目の軸は、個人が形成した希望か、共同で形成した希望かである。

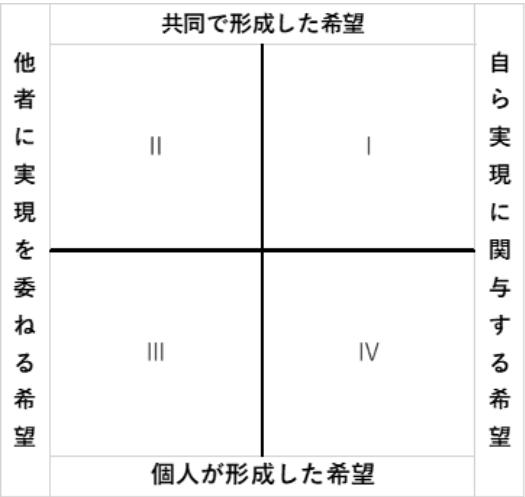

図２　生徒の形成する希望の類型

四類型のうち、Ｉは、授業を通して皆で実現したいと思う希望を決め、実際に実現するために行動を伴うものである。そのため、難易度は高いが、最も社会に参画し社会を形成していくことにつながる希望であると考えられる。

授業でみられる児童・生徒の願いは、社会に対してだけでなく、学級の他の子どもへ向けられることがある。教室も一つの社会空間であることを考慮すると、こうした教室のなかまへ希望をもって、互いに働きかけることも、児童・生徒が社会への希望を形成する上で重要であると考えられる。

(3)授業で希望を実現するための教師の方略

授業実践記録の分析から、授業づくりをする際に多くの教師は、学校での授業と社会での現実を如何に接続するか、如何に児童・生

徒に切実性を持たせるかということを課題にしていることが明らかになった。こうした課題への対応が、社会への希望を形成する授業をつくる上でも鍵になるとみられる。こうした課題に対して、次のイ）～ト）のような方略がみられた。これらの方略は、扱う内容や児童・生徒の状況を考慮しながら実施することで、有効な手立てになると考えられる。

イ）児童・生徒にとってショッキングな事実であっても隠さずに五感に訴える形で提示する。
ロ）児童・生徒にとって身近な現実・事象を取り上げる。
ハ）具体的な人物に焦点を当てながら現代社会の諸課題を取り上げる。
二）架空の事例から現実の社会へとの接続をはかる。
ホ）社会でのコミュニティの状況を教室に持ち込む。
ヘ）教室での生徒の状況と社会問題とのつながりを考える。
ト）状況に応じて、児童・生徒の反応をあせらずに待つ。

(4)社会的な希望を育む授業実践例の提案

以上のように、授業実践記録の分析を通して、社会の文脈、学校での児童・生徒とのやりとりの文脈、教育団体・学会・教育行政といった教育関係組織がつくり出した文脈、の三つの文脈を意識しながら、児童・生徒が自分自身でも実現したいと願うような希望を、学級で共有することが重要であることを明らかにした。また、社会への希望を形成する上で児童・生徒に切実性を持たせることが鍵になり、このような切実性を持たせる上で有効な方略が多数あることを明らかにした。

以上の知見を授業実践の開発へと応用し、社会科及び公民科で実践できる活動を提案した。

具体的には、日常生活の中で接するニュースを「社会的な見方・考え方」の視点と、社会に対する願い（希望）に着目しながら読み解き、自己とのかかわりを考えながら紹介し合う活動を提案した。この活動は、2017 年に告示された新学習指導要領に対応しながら、社会への希望を形成し他者へ伝える習慣を身に付けることを重視した実践である。これまでの授業実践記録に掲載されている授業では、特定の単元が扱われており、希望を形成することにつながる実践であっても単発で終わってしまうことが危惧される。そのため、授業の合間に繰り返し実践できる活動を提案した。日常生活で接するニュースを、希望に着目しながら読み解き、自分はどのようにかかわりたいのかを考え、発表する活動は、児童・生徒が自分自身でも実現したいと願うような希望を形成し、他者と共有することにつながると考えられる。

(5)位置づけとインパクト、今後の展望

希望を持てず社会への参加意欲の乏しい若者の存在が学習指導要領改訂の際の議論でも重要な課題として取り上げられていた。こうしたなかで、本研究は、児童・生徒が社会への希望を形成した授業に共通してみられる開発原理と方法の一端を明らかにした点で意義があるといえる。

今回の研究では、教師が現代社会の諸課題を取り扱う際に、教師自身がどのようにして取り上げる諸課題にコミットメントし切実性を深めていくのかというところまでは、十分に明らかにできなかった。そのため、今後は、社会への希望を形成するような授業を展開する教師が、現代社会への問題意識を高め、教材を作成していく際の実践習慣を明らかにする必要がある。

〈引用文献〉
①勝野正章、2010、「教師の希望学」にむけて、生活教育、No.744、54-63
②玄田有史・宇野重規、2009、はしがき「希望を語る」ということ、東大社研・玄田有史・宇野重規編、希望を語る、東京大学出版会、iii-xviii
③鈴木賢志、2015、日本の若者はなぜ希望を持てないのか、草思社
④中妻雅彦、2013、「緩やかなつながり、絆」で育つ教師―「教師の希望学」の可能性―、愛知教育大学研究報告　教育科学編、No.62、167-174

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）
①村井大介、2017、授業で形成される希望に着目すること、考える子ども、査読無、第 376 号、64-65
②村井大介、2016、教師研究における希望学の応用可能性―教師の希望についての問いの在り方と探究方法―、教師教育学の独自性と方法論研究、査読無、第１集、47-57

〔学会発表〕（計３件）
①村井大介、2017、公民教育における「社会的な見方・考え方」の応用可能性―資質・能力から希望を視点にした実践的な習慣の形成へ―、中等社会科教育学会
②村井大介、2017、中等公民教育の授業実践で現代社会の諸課題の解決は如何に構想されてきたか ―「希望」を視点にして実践研究・実践記録を読み解く―、日本社会科教育学会
③村井大介、2016、『社会科教育実践の歴史（中学・高校編）』を希望学の視点から読み解く―教師の志向と生徒の形成する願いに着目して―、日本社会科教育学会

〔図書〕（計１件）
①江口勇治 監、井田仁康・唐木清志・國分麻里・村井大介編、2018、21 世紀の教育に

求められる「社会的な見方・考え方」、帝国書院、264-273（第４章第 7 節「現代的な諸課題の解決と社会への構想につながる見方・考え方の育成―資質・能力から社会への希望を視点にした実践的な習慣の形成へ―」）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
村井　大介（MURAI, Daisuke）
静岡大学・教育学部・講師
研究者番号：８０７７９６４５